様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 21 日現在

機関番号：32689
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20530704
研究課題名（和文）　アート活動（演劇、美術）を組み込んだ教員養成カリキュラムの開発、実践、評価
研究課題名（英文）　Development, Practice and Evaluation of the Techer Training Program with Art-related Activities Embedded

研究代表者
保崎　則雄（HOZAKI NORIO）
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：70221562

研究成果の概要（和文）：　本研究は、教員養成課程プログラムの改善に焦点を当て、身体、記号を使ってあるメッセージを表現することを実践し、その効果を調査した結果、高い評価をもって受け止められた。演劇ワークショプは有用性の指摘が高かったことが特徴的であった。ただ、その有用性の指摘は、ある程度の予想通り具体性が、課程学生＜嘱託員＜現職教員という順であった。映像制作においては、デジタル映像表現への馴染みがあまりないため、自分が新しい分野の刺激を楽しんだという評価がやや多かった。

研究成果の概要（英文）：The present study investigated the following two aspects of teacher education. One is how art-related workshop activities were accepted and evaluated by the three different but closely related groups, namely: the students registered in the teacher certificate course, teachers-to-be (ready to take job interviews in municipal/prefectural boards of education after graduation of college), and in-service teachers. The other is an investigation of the UK’s educational practices such as the Creative Partnerships Program, Creativity Culture and Education and Find Your Talent in terms of how effective those nation-based activities are, and what kind of problems arise as each school raises their hand to request workshops at their school given the limited budget.
More exactly, act workshops and media production workshops were conducted for the above three groups. Together with the workshops, a class of Media Production, offered to the students in the teacher certificate course, was conducted and evaluated. The result of the questionnaire shows the workshops were highly appreciated by the three groups. However, in-service teachers mentioned more exact situations in which what was learned in the workshops could be applied.
The investigation (including an interview with the director of Find Your Talent) of the British educational system indicates tangible effects in several aspects. One is there are more and more requests coming from each school. Another is there are more students who would like to pursue their career related to the content of the workshops. There is also a problem in this system, namely, how the workshops can be incorporated into the curricula of each school requesting workshops, given the limited budget. There will be further investigations as well as practices of these kinds of workshops in teacher education within Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：　教育学・教育学
キーワード：演劇ワークショップ、教員養成、教員研修、コミュニケーション、メディア表現

１．研究開始当初の背景

教員は、子ども（学習者）との協同的な教授・学習活動を展開するときに、スムーズな言語コミュニケーションを取ることが期待されている職業である（久米、1999）とされるが、実際には、子どもとのスムーズなコミュニケーションが取れていない場合も多々あり、また、それに役立つような研修、授業を養成課程で受けた人は少ないと思われる。

各地方自治体、各学校は、さまざまな内容の教育研究集会、研修を実践しているが、アート活動を正面から取り入れた教員養成課程はまだ非常に少ない。そのような中、戦後の教員養成において、グランドデザインを描くときが今来ているとの佐藤（2006）の指摘は傾聴に値する。本来教職という専門職の性質を考えれば、「現場に出てから」身につける、のではなく、可能な限り「現場に出る前に」学び、習得されていることが重要である。

この分野では一歩先を行っていると思われる英国では、大学卒業後の研修として各大学が実施している PGC（Postgraduate Certificate）あるいは大学などの高等教育の教員には、PGCHE（Postgraduate Certificate in Higher Education）といった研修システムが存在し、実践されている。

英国ではそれに加えて、2004 年度より国家プロジェクトとして始まった Creative Partnerships という現職初等中等教育教員のための研修システムも実施されている。この CP プログラムは、各学校の要請に応じて、美術、芸術専門家が各校に出向き、研修を行ない、現職教員の意識向上、資質向上を計るというものである。実際、研究者らが、本年７月にロンドンにて研修担当者にインタビューした中で、その主旨、課題、展望などにおいて、我が国に応用可能な部分と修正すべき部分が存在することを確認した。知識ベースが少なく、効果への期待は大きいものの、関係者らもまだ本格的な評価はできないとのことであった。

２．研究の目的

本研究は、教職課程履修の学生を対象として、教室内外、学校内でのより効果的で、しなやかなコミュニケーション活動を増進するために、アート活動（演劇、美術）に関するワークショップを組み込んだカリキュラムを開発し、実践し、評価することを主たる目的とする。

教職を目指す学生集団に対する演劇や美術の要素を含んだ参加型ワークショップでの研修、授業といった試みは現行教員養成プログラムの中でも大きな意味のある「学び」であると判断される。それは教材作成に美術的な素養が役立つというような表面的なことだけでなく、本来の伝え合う、関わり合う、表現し合う、理解し合うという人として根源的な部分での自己表現、他者理解、そして自己開発の部分であり、言い換えれば、教員のコミュニケーション力の間口と奥行きを広げることが期待されるようなものである。

そこで、本研究の主旨として、我が国の現状において、大学の現行教員養成課程の授業の中で、実践してみる必要があると考えた。教育実習に出る前に演劇、美術等のアートワークショップを経験し、伝え合うこと、わかり合うこと、つまりはシームレスなコミュニケーション活動を営むことができるようになることは現場で必ず役に立つ。本研究で対象とするのは、まずは教員養成課程の学生であるが、比較検証のため、現職教員を対象にした研修も合わせて行なう。

３．研究の方法

(1)国内外での実態調査

研究の初年度（2008 年度）は国内外の現職教員研修プログラム、教員養成課程プログラムにおける芸術活動の実施状況を調べた。国内では関東圏の教員養成大学、養成課程を持つ大学を対象とし、海外では英国のプログラムと米国のプログラムについて調べた。それら実態をふまえた上で、実際に国内で芸術系ワークショップ実践活動をしているいくつかの団体との連携も得て、実施するワークショップの内容を模索し、カリキュラムの立案をした。

(2)ワークショップの実践

次年度（2009 年度）はワークショッププログラムの実施、形成的評価、プログラムの修正という一連の過程を、主に研究者らが担当する教員養成課程の授業科目において一定期間実践した。形成的な評価のために授業をビデオカメラで録画し、参加者の様子を分析した。また、授業後に個別のインタビュー調査と質問紙調査を実施して参加者の意識を分析し、プログラムの評価につなげた。

(3)プログラムの評価

最終年度（2010 年度）は前年度実施した教員養成過程の学生へのワークショップに加

えて、現職教員研修における芸術系ワークショップを実施し、その後インタビュー調査と質問紙調査によってその効果を検証した。これら調査をふまえて、プログラムの総括的な評価を行い、教員養成過程プログラムや教員研修プログラムと芸術系ワークショッププログラムの有機的なつながりを模索し、効果的なプログラムのデザインにつなげた。

４．研究成果

(1)本研究の目的の一つである海外の教員養成課程カリキュラムの分析を通して以下に挙げる知見を得られた。

①米国マサチューセッツ州の事例分析

米国の教員養成カリキュラムは、共通するないようはあるものの、原則的に各州が個別のカリキュラムを設けている。研究者が２ヶ月ほど滞在し調査したマサチューセッツ州のカリキュラムでは、メディア表現、メディア利用というものの重要性が記述されておりボストン地区の各学校には Media specialist が配属され、指導と相談にあたっているというシステムが特徴的であった。また、同地区にある Boston College の教員養成課程受講生による教員養成プログラムの評価内容について調べた。骨子となる６つの主張に共通する特徴的なことは、教師は「social justice」を実現するために働くこと、そしてそれの具体的な教育方法をもつことを目的とする、という項目であり、さらには言語について学ぶことを強調していることであった。具体的には 1)subject matter knowledge 、 2)pedagogical knowledge 、3)pedagogical content knowledge、という分野の知識、方法が指摘されている。

②英国 Creativity, Culture and Education

英国の Creativity, Culture and Education という国家的な教育プロジェクトのもとで行われている Find Your Talent というプログラムでは芸術分野を中心として、学校と芸術家をつなげ、学校の要望に基づき、学校に出向いてワークショップを行い学びの刺激と向上が目指されている。プログラムディレクターによれば、その場での興味関心の向上もあるが、将来その分野を思考する子どもが増えているということ、もともとは児童、生徒が対象であるが教員も刺激を受けて授業が変わるということなどが指摘された。またプログラムの課題としては、学校と折半で実施する予算のことであり、要望が供給よりも多く、順番が回ってこないこと、そしてプログラムの評価が難しいという点が指摘された。

これら海外の現状の一方で、日本では演劇や美術を含め種々の芸術を学校に持ち込もうという動きは、行政から委託された NPO 団体や美術館や劇場が主導しているというのが現状である。それら精力的な実践においてはワークショップを進行していくファシリテータの養成や芸術による教育を実践するアトリエスタの養成など個々に魅力的かつ必要とされているプログラムが実施されている。しかしながら、それらプログラムが教員養成の領域にまで波及してくるまでには課題が残されている。まずは教員養成カリキュラムとの整合性の問題であり、実施予算の問題や連携組織づくりの問題が考えられる。

(2)本研究では研究者が実際に受け持っている教員養成課程の学生や地域の教員に向けて実施した教員研修に、芸術教育の目的ではなく、教員養成の目的として芸術ワークショップを持ち込み実践したということが成果の一つとして挙げられる。実際のワークショップの内容は、演劇ワークショップでは一般的な、姿勢、呼吸、発声、発語、発話、台詞という一連の流れをたどるもので、舞台俳優２名によって実施された（図 1、図 2)。このプログラムに参加したのは、大学の教員養成課程の学生 19 名、現職教員 32 名、地域の教育センター所属の嘱託講師 12 名であった。それぞれのグループは教育経験の有無という尺度で比較の対象とした。また専任ではないが教壇に立つこともある嘱託講師は課程履修の学生と現職教員の間に位置するグループとして位置づける。以下に、インタビュー調査および５段階尺度評価と自由記述による質問紙調査をふまえて、参加グループそれぞれの反応をまとめる。

全体的な評価としては、このような演劇 wksp は参加して楽しい、役に立つだろうという評価がなされたことは、今後の教師教育への参考になるものと思われる。

a）現職教員と教員養成課程学生の比較

実施したプログラムの重要な目的である「自分の身体のことを知ることの重要性」という点について、教員と学生を比較すると「教員 4.3<学生 4.58」という有意傾向が見られた。また身体、言葉、呼吸などをあつかった内容に関して、授業にいかせそうだという問いに関しては、（教員 4.2<学生 4.32）ほとんど差がみられなかった。

b）嘱託講師と現職教員の比較

総じて、嘱託講師と現職教員の評価は、似ており、（学生）と（嘱託＋教員）間での差が一番大きいことがわかった。この理由は、たとえ常勤ではなくとも、教壇に立つことのある嘱託講師は、現職教員と近似する価値観、教育観があるからであろう。

c）嘱託講師と教員養成課程学生の比較

この両群間には、著しい差はなかったが、総じて、学生群は嘱託群よりも多くの期待がるということが明らかになった。教育現場の経験のない学生は、きっと役に立つだろうと

考えるのは自然なことである。

ある程度教育現場に身を置いている嘱託は、ひとつのことで問題が解決しないであろうということも体得しているためであるかもしれない。ただ、このような活動に対する期待は、現職教員よりも大きいという結果が出た事は興味深い。嘱託は教員と学生の中間あたりに位置するという考え方が、アンケート結果にも反映されるけっかとなった。

最も差が出た項目は、演劇 wksp を教員養成課程に含めるとよい、という問いに対する反応であった。学生 4.37>嘱託 4.3>教員 3.9 と、既に常勤の教員は、教歴、性別によらずこのような wksp を養成課程に含めることにやや消極的であり、学生、嘱託は役に立つから取り入れるべきであると考える傾向が強いのに対し、教員は、役立つであろうが養成課程に取り入れることには消極的であるという判断をしたのである。

このことを自由記述部分と絡めて考えると、教員は、職場に出てからの研修という形式を好み、またより役立つという考える傾向があるのかも知れない。

図 1:実践の様子「身体を知る」

図 2:実践の様子「シャドウ縄跳び」

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①中野美知子、早稲田大学での ICT 活用実践、LET50 周年記念全国大会、査読無、Conference Proceedings、2010、pp.30-44

②鈴木広子他 3 名、日本の英語教育は CALP を育成しているのか-アメリカの中等教育、日本のイマージョン教育、日本の小学校教科書の分析から-、JACET 関東支部 2009 年度研究年報、査読有、2009 年度研究年報、2010、pp.3-31

③中野美知子、英語教員研修の問題点：英語力の強化と授業力の強化～海外研修か ICT を利用した国内研修か、JACET-ICT2009 年度実践報告書、査読無、1 巻、2009、pp.257-276

④鈴木広子、教員間の協働作業における主体的行為、東海大学教育研究所紀要、査読有、17 巻、2009、pp.51-73

〔学会発表〕（計 5 件）

①保崎則雄、北村史、結城尊弘、「英語ノート」を素材として展開する小学校英語活動用マルチメディア教材の制作と評価、第 36 回日本教育工学研究協議会 JAET2010 上越大会、2010/11/19、上越市立春日中学校

②Nakano, Michiko、Cyber Collaborations in East Asia and Program Assessments: Cross-cultural Distance Learning(CCDL) Programs at Waseda University 、International Conference for English as Specific Purposes、2010/05/21、Southern Taiwan University

③保崎則雄、教職課程履修学生（英語科）への「演劇ワークショップ」実施の評価と考察、第 49 回外国語教育メディア学会、2009/8/5、流通科学大学

④中野美知子、Curriculum Innovation, ICT and International Standards、大学英語教育学会、2009/9/12、北星学園大学

⑤鈴木広子、ESP におけるブレンド型プロジェクト学習-社会構成論の視点から、第 49 回外国語教育メディア学会、2009/8/5、流通科学大学

６．研究組織

(1)研究代表者

保崎　則雄（HOZAKI NORIO）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：70221562

(2)研究分担者

中野　美知子（NAKANO MICHIKO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：70148229

鈴木　広子（SUZUKI HIROKO）

東海大学・教育開発研究所・教授

研究者番号：70148229

(3)研究協力者
北村　史（KITAMURA FUMITO）
早稲田大学・人間科学学術院・助手
研究者番号：90613860